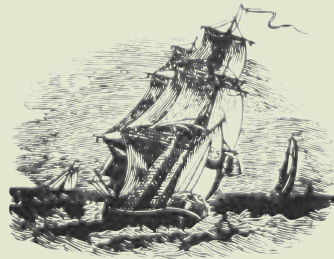


羅針盤



私の皮膚科修業

森 俊二

Shunji Mori

岐阜大学名誉教授

私は昭和 32 (1957) 年の卒業で、当時はインターンを 1 年済ませてから進路を決める制度で、インターン期間中は無給でした。

学部のところから将来どの方面に進もうか、といういろいろ悩んでいました。一般的には内科、外科といったいわゆるグロス (groß) の科がまず浮かびますが、東大病院でのインターンで研修した内科では若い医局員は全員無給で、なかには医局のソファーに寝泊まりしていて、入浴は中央手術部の風呂にこそそそ入っている人もいる有様を見て、貧乏商人の息子だった私には大学院に進む余裕はありませんし、何年続くかわからない無給医生活はとてもできないと思っていました。

その後、同級ですでに皮膚科に決めていた吉田実夫君 (故人) からの誘いもあり、医局長に会ったところ、秋から有給にしてくれるという単純な動機で皮膚科に入ることになりました。

しかし偶然のように入った皮膚科ですが、医局生活を重ねるにしたがって「眼で見て、触って、ルーペで拡大して病変を確かめられる」皮膚科の魅力に段々引き込まれていきました。趣味のカメラも臨床写真に生かせましたし、教室に入ったばかりのツァイス製ウルトラフォトという超高級顕微鏡の操作担当を命ぜられて、たくさんの病理標本の写真を撮ることができ、大変良い勉強になりました。

当時の東大皮膚科教室には有給 (助手) になれる期間は 1 年限りという決まりがあり、1 年経つと外勤に出ることになり、以後在局 18 年の間に虎の門病院、東京専



売病院、関東中央病院、三楽病院および関東通信病院と 5 つの病院に飛びとびに勤務しました (ちなみにこの助手 1 年限りという内規は大変巧妙な決まりで、後年、岐阜大学で医局人事を行っていたときに、この決まりがなかったために外勤を拒否されて困らされたことを思い出します)。

この、こま切れの外勤は大学での研究にはマイナスですが、そのかわり外勤先での先輩諸先生との出会いがあり、多くの得がたい経験と研修を積むことができたと思います。思い出だけでも虎の門病院で横関 猛先生に教えていただいた軟膏療法を始めとする種々の処置法、関東中央病院で西脇宗一先生 (故人) から受けた診断学を始め、多くの優れた先輩から教えるを受けました。大学では西山茂夫先生から病理所見の読み方、宮本正光先生から研究指導をいただくなど数々の教えるを受けました。

岐阜大学に移ってからは 18 年にわたって教育、研究、診療の 3 つを担当した訳ですが、どれも力及ばなかったことを痛感しています。ただし手術に関しては虎の門病院の大原國章先生 (現副院長) に非常勤講師をお願いして、むずかしい手術はすべて出張していただき、見事な手腕を教室員とともに勉強することができました。

定年退職後は千葉県八千代市で皮膚科医院を開業して平成 20 年 5 月まで 13 年間の診療を、時に苦しみ時に楽しみながら続けることができました。

私の皮膚科修業はたくさんの病院に勤務して多くの優れた先輩諸先生の教えるを受けることができた、幸運なものだったと思います。